

万葉の川心

元横浜市立子安小学校 教諭 澤井園子

河を詠める

(巻第七 一一三九番歌)

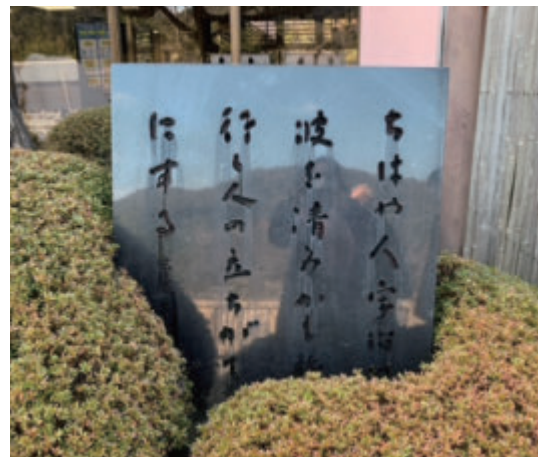
ちはや人 宇治川波を 清みかも

旅行く人の 立ちかてにする

職場の昼時、ソーシャルディスタンスを取りながら、保育園勤務一年目のフレッシュな同僚と食事をとる。食後にマスクをつけると、彼女は矢継ぎ早に、「午前中の仕事はだめでした。いろいろ考え過ぎて緊張すると、いつも出来る事が出来なくて、本当に自己嫌悪に陥ります。子どもたちとどうやったら仲良くなれるのだろう。屁理屈を言われると、どう返していいのかもすぐに思いつかなくて……」娘と同年ほどの彼女の話を聞きながら、なんて真っ直ぐなんだろうと眩しくなる。経験は自分の方がたくさんしているのだが、この勢いには敵わない。若さ、真つ向から困難にぶつかるパワー、もがきながらも前に進むとうとする感じは、きつと子どもたちが無意識に大好きなもの。若い時は答えが分からなくて苦しいだろうけれど、あなたがそこにいる、ただそれだけで、周囲にお日様のような影響を与えているのは確かなのだ。

この歌の「ちはや人」とは、宇治に掛かる枕言葉で、「勢い盛んな人」を意味する。「千早振る」の千早は神威がたちどころに及ぶこと、振るは揺り動かす生気を呼び起こすことで、「氏」人に掛かる。さらに宇治は、東と南北の三方が山に囲まれ、宇治川が西の平野に流れ出すところに位置している。交通の要衝であり、歴史や文学の舞台としても名高く、万葉集にも数多く詠まれ

ている。「勢い盛んな氏人、その氏ではないが、宇治川の波があまりに清らかであるからだろうか。旅行く人が立ち去ることができずにいるよ。」旅先で見ると川は、なぜこんなに人を惹きつけるのだろう。荘厳な山々から「氣」の贈り物を携えて大地を流れゆく姿。特に橋の上から上流を望むとき、そのすべてが自分に降り注ぎ、時に浄化され、時に満たされ、時を忘れて眺め入る。川波は日差しにきらめく。そのせせらぎは、かつて母のおなかの中にいたときの原点を思い起こさせるのではないかとも思う。川の懐はそれだけ深い。普段は人工物に囲まれて生きていくけれど、実は人も自然の中の一部であることを実感するようなひとときだ。千年以上も前に生きて歌を詠んだその人は、どんな思いでこの河原にいたのだろう。そして、千年後の誰かもきつと、同じように立ち去りがたくこの川を見つめているだろう。宇治川は、琵琶湖の最南端から発した瀬田川が天津を南下し、京都府宇治市あたりで宇治川となる。写真の碑は、宇治市宇治塔川の宇治市観光センターの前にある。冬のオリンピック・パラリンピックが終わった。千早振る選手たちはみな、最善を尽くして輝き、観るものの心を震わせ、熱くした。今、少し離れた隣のテールブルにいる彼女もまた、私の心を豊かにしていることをいつか伝えたい。きつとそれが本当に伝わるのは、彼女が定年を迎える頃になるだろうけれども。



宇治市宇治塔川宇治観光センター前